

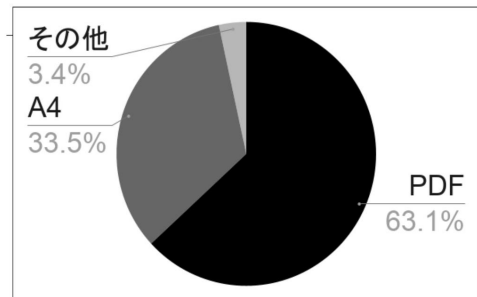
紙とPDF 分かれた意見

昨年度の2025年の4月から開成校新聞はPDFをクラスルームに配信するデジタル体制へと移行した。その後A3紙を主軸とした紙媒体へと変転した。今回は体制変化の経緯や両者の意見の対立について報じる。

開成校新聞の変遷

コロナ後、活動が再開してから新聞局の活動方針は、A4一枚でも記事ができたらずくに発行し、生徒に新聞を身近に感じてもらうことだった。しかし、近年局員数が増加し発行枚数も増えたため、従来のA4新聞では印刷による紙やインクなどの資源ロスを心配する声が上がった。新聞局内では紙派が多かったが、昨年4月からPDFでの新聞発行へと移行することにした。

その後保護者の方々から開成校新聞はもう発行されないのかと問い合わせを受け、PDFでの発行では保護者に新聞が届かないという問題が発覚した。そのため11月よりA3用紙を使用した紙媒体へ戻すことにした。紙媒



高校生新聞をより身近に

前局長 宮崎ほのか

「アンテナ」
、高校生新聞は学校生活という小さな社会で起こる出来事を伝える特殊なメディア。だからこそ高校生自身の声や想いを丁寧に掘り下げて伝えることで、「共感を含めた情報の共有」をす

ることが、新聞局としての目標であり使命だろう。それによって読者は記事を「自分たちの生活の一部」として捉え、それを評価したり話を広げたりといった生身の体験が付随するのが本来あるべき姿なのではないか。

デジタルの配信だと情報と受け手の間に端末という媒体が入ることどこか距離が生まれてしまい、第三者感が強くなってしまふ。一方、紙の新聞だと実際に手で触れて目にするという身体的な経験を伴う。それによって書き手と読み手の距離が縮まり、情報をより身近なものとして届けることができる。この身近さが、私が考える高校生新聞の意義「共感も含めた情報の共有」に必要なと信じている。

生徒の意見

新聞局では昨年度の11月に読者である生徒に対して、発行は紙が良いかPDFが良いかアンケートを行った。その結果（上図）はPDF派が149名、紙派が79名、その他が8名となった。新聞局内の意見とは異なり生徒内ではPDFが紙の約2倍の支持を得た。

PDF派の意見では「新聞をすぐに読むことができる」「所持が簡単」「新聞をなくさない」等の回答が見られた。一方、紙派の意見では「新聞を必ず読むことができる」「家に置くことができる」といった回答が多く確認された。

局内の意見と願い

新聞局内では生徒の意見とは対称的に、紙派が80%以上を占めている。主な理由としては「新聞なのだから、PDFよりも紙で発行したい」や「紙だと、生徒に配布されたときの反応を見ることができてうれしい」「自分が作り上げた新聞を読

んでくれることがやりがい」等があげられる。環境配慮や情報保護の観点から電子化が推奨される現代だが、新聞を紙で読み、情報を得る楽しさは、PDFにはないものである。今まで読んでくださった方々、あまり目を通さないという方々、ひいては保護者の方々にも、ぜひ開成校新聞を読み、学校生活や開成生の活躍に触れていただきたい。（大口・佐野・齊藤）

開成校新聞

発行
開成中等新聞局
発行責任者 阿部
制作者
小川・大口・齊藤
佐野・村重

紙面紹介

1～3面
ウィンタースポーツ
4面 紙vsPDF

全国入賞！

スキー

国中学校スキー大会の女子スペシャルジャンプで6位に入賞を果たした。

▲表彰される安立さん



3年2組の安立寿音さんは第63回全国中学校スキー大会女子ジャンプで優勝を果たし、第104回全日本スキー選手権大会ノーマルヒル女子に中学生で唯一の出場を果たした。

また、2年4組の佐々木晴姫さんは第63回全

▲スキージャンプをする安立さん

基礎スキー

3年1組の木菱陽葵さんは、韓国で行われた国際大会Middle 1 womenの部で2位、全日本ジュニアスキー技術選手権大会ジュニアユース女子の部で3位、第15回北海道ジュニアスキー技術選手権大会ジュニアユース女子の部7位に入賞を果

たした。

▲表彰される木菱さん



▲スキーをする木菱さん

5年2組の高森紅羽さんは、全日本ジュニア大会ユース女子の部で3位、第15回北海道ジュニアスキー技術女子の部で2位に入賞を果

また韓国で行われた国際の大会、High 1 womenに日本代表で

出場を果たした。

▲スキーをする高森さん



▲表彰される高森さん



▲表彰される渡邊さん



▲スキーをする渡邊さん



ウィンタースポーツ大活躍！

飛んだ！伸びた！勝った！

2月3日から6日に長野県野沢温泉スキー場で行われた第63回全国中学校スキー大会の女子スペシャルジャンプで、現3年の安立寿音さんが優勝、現2年の佐々木晴姫さんが6位に入賞した。また、安立さんは、高梨沙羅選手らワールドカップ出場選手も出場した第104回全日本スキー選手権大会ノーマルヒル女子に中学生で唯一出場した。活躍した2人に話を聞いた。

大会を振り返って、た怪我への不安を抱えて、安立さんは「メン安立さんは「優勝するながらも、「最後まで頑張ることができて嬉しかった」と素直な喜びを見せた。一方、佐々木さんは大会2週間前に負った怪我への不安を抱えて、安立さんは「メン

スキージャンプ全国 足立さんが優勝 佐々木さんが6位入賞



▲笑顔で答える安立さん（右）と佐々木さん（左）

「母と妹が下で応援してくれていたことが力になったと思う」と支えの存在をあげた。今回好成績を残した2人だが、それぞれ辛い時期も経験している。安立さんは「何度練習しても今大会で上位だった選手に勝てず、メンタルが崩れた中で練習するのが辛かった」と明かす。それでも、コーチの指導に応えたいという思いが支えとなり、



▲滑走姿勢について説明する佐々木さん

大会前、スタート前のルーティンにはそれぞれ個性が表れている。安立さんは、「緊張し尊敬している先輩」と安立さんに対する憧れを口にした。最後に今後の目標を聞くと、安立さんは「海外で行われるジュニアの国際大会に日本代表として出場したい」と即答した。佐々木さんは、「現在練習しているミディアムヒル、ノーマルヒルからさらに上のレベルの大倉山のジャンプ台で飛びたい」とさらなる挑戦を掲げた。

（小川）

開成校新聞

3月20日、22日に長野県の菅平高原スノーリゾートで行われた第10回全日本ジュニアスキー技術選手権大会でそれぞれの部門で3位に輝いた5年生の高森紅羽さん、3年生の木菱陽葵さん、渡邊凛太郎さんにインタビューを行った。（小川）

辛いことを乗り越え掴んだ3位



▲笑顔で取材に答える高森さん

①今シーズンは多くの辛いことや悔しい思いを経験したので、最後の大きな大会である本大会で3位に入賞できたのは本当に嬉しかったです。②メンタルコントロールです。上手に滑れなかった時には、テンションが下がってしまい、他の滑りに影響が出てしまいましたが、いつもの滑りができるように思います。特に、3月上旬に、大きな怪我をしてしまい、とても落ち込んでしまったのですが、コーチが「1番のライバルは自分自身。自分に負けないで」と励ましの言葉をかけてくれました。その言葉に感動して、全日本も頑張ることができました。③私は体が小さい方なので、その中でいかに迫力のある大きな滑りをできるかという点に焦点を絞って、力を入

基礎スキー 本校3名が3位に入賞



▲取材に答える渡邊さん

①同大会には小学3年生から出場し、4年連続で入賞をしていました。しかし、昨年の同大会で入賞を逃し、連続入賞が途絶えてしまったため、悔しさを感じていました。そのため、今大会で3位に入賞し、

質の高い、充実した練習を行うことができました。④大会期間は宿泊する場合が多いため、朝食時間から逆算して起床し、心身のコンディショニングの調整とランニングを行っています。



▲取材に真剣に答える木菱さん

①昨年の同大会では、悪天候でコンディショニングが悪かったのですが、今年は快晴だったため良いコンディションで滑ることができたことが本当に良かったと思います。また、北海道の雪質とは異なる雪質を経験することで、自

「昨年の雪辱を果たせた」

大怪我…大きくなったコーチの存在